

4年3月	主題名	友達	内容項目	B 友情、信頼
	教材名	名前	出典	京都市小学校道徳教育研究会
	学習のねらい	ひろこさんと英順さんの「名前」についてのやりとりを通して、友達の気持ちを理解し、互いに信頼し、助け合ってよりよい人間関係を築いていこうとする心情を育てる。		
	本時の評価	二人の心の中に、お互いが信頼できる大切な友達であるという思いがより深まったことに気付いている。		
	授業に至るまでに	<ul style="list-style-type: none"> ・韓国・朝鮮のことや戦争のことについて、児童が知っていることを把握しておく。 ・今までの日常生活の中で、友達と励まし合ったり、助け合ったりした経験を児童の日記や作文などから把握しておく。 		
	学習活動(発問)	*留意点	評価の視点 (評価の方法)	
導入	1 戦争に関わる京都の町の出来事や、京都で暮らす在日韓国・朝鮮人の人々の様子について知る。	*「馬町空襲」「西陣空襲」などの状況がわかる資料を提示したり、戦争が原因で韓国や朝鮮の人々が京都の町に暮らすようになったこと、本名や通名の問題などについて説明したりすることで、資料の内容の理解を助ける。		
展開前段	2 教材「名前」を読んで話し合う。 (1) 「すてきな名前だと思うよ。」と言われた時、英順さんはどう思ったのだろう。 (2) 「ホン・ヨンスンよ」と大きな声で言った時、英順さんはどんな気持ちだったのだろう。 ☆(3) 夕ぐれの中を歩く二人は、心の中でどんな会話をしているのだろう。	*名前の読み方については適切に指導する。 *自分のことを分かってくれるという信頼感が大きな自信になることに気付くようにする。 *二人の心の中に、お互いが信頼できる大切な友達であるという思いがより深まったことに気付くようにする。	*二人の心の中に、お互いが信頼できる大切な友達であるという思いがより深まったことに気付いて発表している。 (発言内容)	
展開後段	3 友達と過ごした時のことを見浮かべながら、自分はどんな友達でいたいかを考える。 (1) ワークシートに考えをまとめてから、交流し合おう。	*自分の経験を話し合う中で、一人一人を大切にした仲間づくり、友情のすばらしさがつかめるようにする。		
終末	4 友達に関する詩を聞く。	*信じ合い、助け合えることの素晴らしい実感ができるようにする。		
板書計画	<p>英順 名前 ひろ子</p> <p>「すてきな名前だと思うよ。」</p> <p>「それはひみつよ。」</p> <p>「ホン・ヨンスンよ。」</p> <p>「私の名前をおぼえてね。」</p> <p>「あなたに知らせたかった。」</p> <p>「今はまだ言えない。」</p> <p>「いつか話すからね。」</p> <p>「どうして教えてくれないの。」</p> <p>「さびしいな。」</p> <p>「うれしい。」</p> <p>「はげましてくれた。」</p> <p>「悲しませたくはない。」</p> <p>「自信をもつて」</p>			
授業後	<ul style="list-style-type: none"> ・学校生活の中で相手の立場や気持ちを理解し、友達同士の関係を深めていくようにする。 ・人を傷つける言葉や、いじめを許さない学級の雰囲気づくりを大切にする。 	<p>「わたしたちの道徳」の活用</p> <p>「行動の記録」との関わり</p>	<p>2-(3) 友達とがいに理解し合って</p> <p>思いやり・協力</p>	

名前

ひろ子さんにはとても仲のよい友達がいます。

名前を「中村英順（エイジュン）」と言いました。
初めてこの名前を聞いたとき、ひろ子さんは、
「めずらしい名前だなあ。」と思いました。

「この名前、だれがつけたの。」

と、ある時聞いてみました。

「少し変わった名前でしょう。」

英順さんは、ひろ子さんの顔をのぞきこみながら言いました。

「この名前はおじいちやんが考えてくれたのよ。
でも時々、男の子みたいな名前だ、なんて言わ
れてからかわれたこともあるわ。」

英順さんの目がちょっと悲しそうに見えたので、
ひろ子さんは思わず大きな声で言いました。

「英順ってステキな名前だと思うよ。」

「ありがとう。私の大好きなおじいちやんからつ
けてもらった大切な名前なの。」



それから、英順さんはひろ子さんの目をじっと見つめて言いました。

「この名前にはね、もうひとつのがあるの。」

「もうひとつのよび方、ねえ、教えてよ。」

「それは秘密よ、いつか教えてあげる。」

「・・・・・。」

ひろ子さんは少しがつかりしました。

総合的な学習の時間に、ひろ子さんたちの学年は、世界のいろいろな国について調べることになりました。

「ぼくは図書館に行つてみる。」

「私はインターネットを使つて調べるわ。」

「みんなやる気十分です。」

ひろ子さんは日本の国に一番近い、「かんこく・ちょうせん韓国・朝鮮」について調べるグループに入りました。英順さんも同じグループです。

「おじいさんが今度の日曜日、私の家に来るの。韓国や朝鮮のことによく知っているから、いつしょに話を聞いてみない。」

英順さんがさそつてくれました。家に行くのも、おじいさんに会うのも初めてのことでした。

日曜日、わくわくしながら英順さんの家に行きました。おじいさんはとてもやさしそうな人でした。にこにこしながらひろ子さんを見ていました。

「いつもヨンスンとなかよくしてくれてありがとうございます。」

「ヨンスン？」

「この子の名前だよ。」

と言つて、英順さんの頭をそつとなでました。

英順さんはひろ子さんの顔をじつと見つめていました。

おじいさんは静かに語りはじめました。

今から六十年ほど前、日本の国が戦争をしていたころ、英順さんのおじいさんが朝鮮から日本にやつて来ました。おじいさんのほかにも、この戦争が原いんで多くの朝鮮の人々が日本に来ていました。

戦争が終わつた時、日本にはおよそ二百万人もの朝鮮の人々がいました。そのうち、およそ六十万人の人たちが日本に残りました。朝鮮を離れてからすでに長い年月が流れています。そのため帰つても生活する家や土地がなく、仕事を見つけることもむずかしいことでした。おじいさんは朝鮮に帰らないで、そのまま日本に住み続けました。そしてお父さんが生まれ、やがて英順さんが生まれたのでした。

「中村英順という名前は、日本でくらすための名前だよ。本当の名前は……。」

「洪 英順（ホン ヨンスン）よ。」

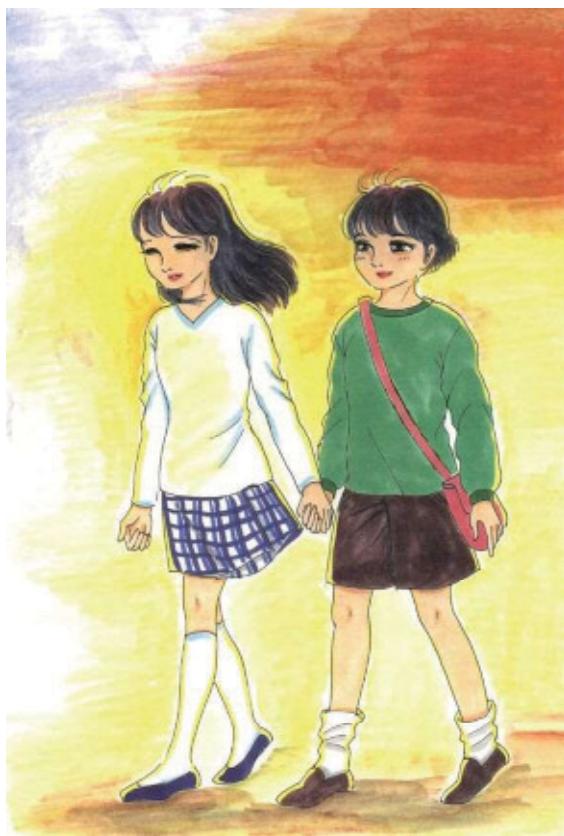
はつきりと、大きな声で英順さんが言いました。

帰り道、英順さんにたずねました。

「これからあなたのこと、ヨンスンとよんでもいい？」
につくり笑わらつて、ヨンスンさんは大きくうなずきました。

だまつたまま二人は歩いて行きました。

夕ぐれのやさしい風が二人を包んでいました。



4年	主題名	郷土を愛する心	内容項目	C 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度
	教材名	宇治茶	出典	京都市小学校道徳教育研究会
	ねらい	長い歴史を持っている郷土の産業について知り、郷土の伝統に誇りを持ち、大切にしようとする心情を育む。		
	本時の評価	京都の産業の一つであるお茶づくりについて初めて知った主人公の思いに自分の思いを重ねて、宇治茶の歴史や、伝統を受け継いできた人のことを考えようとしている。		
	授業に至るまでに	<ul style="list-style-type: none"> 3年生の音楽の授業で「茶摘み」を習っている。その時を思い出してクラスで歌遊びをしておくとイメージがつかみやすい。 また、総合的な学習の時間などで京都の伝統について学習しておくとよい。 		
	学習活動(発問)	*留意点	評価の視点 (評価の方法)	
導入	1 宇治茶について、産地や歴史の要約を知らせる。	<ul style="list-style-type: none"> *様々な場面でお茶に親しんでいることを思い出す。 *お茶は心や体の薬にもなることを話す。 		
展開前段	2 教材「宇治茶」を読んで話し合う。 (1) この茶壺道中を取り仕切った宇治の人は、どんな気持ちだっただろう。 (2) 長い間、お茶の産地を守ってきた人たちは、どんな思いをもって茶づくりをしてきたのだろう。	<ul style="list-style-type: none"> *茶壺道中をすることが、茶どころとして大変名誉なことであったことが伝わるようにする。 *実際の茶畠の写真や茶づくりの様子などが分かる写真が用意できるとよい。 		
展開後段	3 実際に宇治茶を飲んで、香りを楽しみながら、お茶づくりをしてきた人の思いを考える。 (1) 宇治茶を飲みながら、今日のお話をふり返り感じるところを交流しよう。	<ul style="list-style-type: none"> *実際にお茶を飲みながら、長い間、どこにも引けを取らないお茶づくりがされてきた京都の宇治茶づくりに思いがおよぶようにする。 *ワークシートに書いて、交流する。 		宇治茶の歴史や、伝統を受け継いできた人のことを考えようとしている。 (発言・ワークシート)
終末	4 茶道を通して、茶壺の口切の行事等は伝えられていることを話す。	*お茶に興味をもてるような余韻を残す。		
板書計画		<p>家族でお茶を囲んで団欒している挿絵</p> <p>宇治茶</p>		
授業後	学級だよりなどで授業について家庭に紹介し、家庭でもお茶に親しんだり、宇治について尋ねたりできるようにする。		<p>「わたしたちの道徳」の活用</p> <p>「行動の記録」との関わり</p>	<p>P 158～P 163 「わたしたちの心を育てくれるふるさと」</p> <p>公共心・公徳心</p>

宇治茶

郷土を愛する心

「お茶にしようか。」

うちでは、毎週金曜日の晩になると、お茶の時間が始まる。

明日はお休みだし、家族みんなで一週間のできごとを話題にしてのんびりとお茶を飲むのだ。

「今日は、新茶だよ。」

おばあちゃんが、さわやかな香りのするお茶をいってくれる。みんなでお茶とお菓子を囲んで話をするお茶の時間が、私はとても好きだ。

おばあちゃんが、茶摘みの歌を歌いだした。

「それ、音楽で習ったよ。」

「そうだよ。よく知ってるね。では、この話は知ってるかい？」

おばあちゃんは、話を続けた。

「京都には、宇治という茶どころがあつてね、江戸時代には宇治から将軍様のいる江戸までその年の新茶を運ぶために『茶壺道中』ということが行われたんだよ。お茶壺をお殿様みたいて立派なかごに乗せて、おつきの物がたくさん従つてね。大名行列も道をゆづらなくてはならなかつたそうだよ。」

「じゃあ、道々の村の人も？」

「そうそう。この歌は、茶壺行列が村を通り過ぎるまで、みんなが家の中へ息をひそめていた様子が歌われているんだよ。」

「ふうーん。じゃあ江戸時代から、京都でこのお茶づくりが続いているの？」

「いや、江戸時代よりもっと昔から、宇治茶は一級品と有名だつたんだよ。日本には茶どこ

ろがたくさんあるけれど、その中でもずうつとずつと認められるっていうのは、すごいことだね。」

おばあちゃんは、お茶をすすりながら、

「この新茶も、宇治のお茶だよ。」

と、自慢げに、につこりした。

わたしは、さわやかな香りのお茶を口元に近づけながら、お茶を囲む家族みんなの笑顔を見て、長い長い間この味を守ってきた、宇治茶の作り手さんの気持ちを考えてみた。

5年	主題名	郷土を思う心	内容項目	C 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度
	教材名	響け、心のシンフォニー	出典	京都市小学校道徳教育研究会 改
	学習のねらい	わたしが「京都」を誇らしく思えた理由を考えることを通して、郷土（京都）が育んできた文化について理解し、これからも大切にしていこうとする心情を育てる。		
	本時の評価	郷土（京都）が育んできた文化について知り、それらをこれからも大切にしていこうとしている。		
	授業に至るまでに	<ul style="list-style-type: none"> 音楽科でオーケストラについての学習を進めておく。 音楽鑑賞教室の前後に授業を行うことが望ましい。 		
	学習活動（発問）	*留意点		評価の視点 (評価の方法)
導入	1 「ふるさと」について交流する。 ・「ふるさと」と聞いて、思い浮かんだ言葉を教えてください。	<ul style="list-style-type: none"> *本時のめあてを板書する。 「郷土（ふるさと）を思う心」について考えよう。 		
展開前段	2 教材「響け、心のシンフォニー」を読んで話し合う。 (1) おじいちゃんから京都にオーケストラができたときの話を聞いて、「わたし」はどんなことを思つただろう。 (2) 帰り道にオーケストラの人たちを思い浮かべながら、「わたし」はどんなことを考えていたのだろう。 ☆(3) なぜ、「わたし」は「京都」を誇りに思えたのだろう。	<ul style="list-style-type: none"> *教材を読みながら、京都市交響楽団の写真やプロフィールを提示する。 *戦後の復興のために、道路や鉄道、工場などの社会資本の整備に多くの予算が使われたことを確認する。 *コンサートの様子をフラッシュカードを使って掲示する。 *「誇り」という言葉の意味を確認しながら、全体交流を深める。 *オーケストラの人々の思いにも迫りたい。 		
展開後段	3 これまでの生活を振り返り、ねらいとする道徳的価値について考える。 (1) 「オーケストラ」の他に京都にはどのような誇れるものがあるだろう。 (2) 多くの誇れるものに囲まれている「京都」についてみなさんはどう思いますか。	<ul style="list-style-type: none"> *誇れる理由を問い合わせながら、教材文の「わたし」の思いや考えと重ねていく。 *本時のめあてを意識しながら、授業を進める。 		
終末	4 今日の学習をふり返って、本時のめあてに対する自分の思いや考えを書きまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> *私たちの道徳を参照しながら、自分の思いや考えを書きまとめられるようにする。 		
板書計画	<p>郷土を思う心</p> <p>(3) 中心発問に対する児童の発言</p> <p>なぜわたしは京都を誇りに思えたのだろう。</p> <p>我が町京都</p>			
授業後	<ul style="list-style-type: none"> 本時の学習をふまえて、音楽鑑賞教室を迎える。 社会科「わたしたちの生活と環境」の学習（鴨川）につなげて、京都市の多くの人が「郷土を思う心」をもって様々な活動を行っていることに気づかせたい。 		<p>「私たちの道徳」の活用</p> <p>「行動の記録」との関わり</p>	<p>4-(7) 郷土や国を愛する心 公共心・公徳心 勤労・奉仕</p>

ひびけ、心のシンフォニー（京都市交響楽団）

私のおじいちゃんは、音楽が大好きだ。毎年、年末には、京都コンサートホールで開催されるベートーベンの第九演奏会に行っていた。そして今年はわたしもそのコンサートに行くことになった。

その演奏会を開催しているのが、京都市交響楽団といつオーケストラだ。京都市交響楽団は昭和三十一年に「市民文化の形成、青少年の情操向上、住民の福祉増進」の理念を掲げ、日本で唯一の自治体直営のオーケストラとして生まれた。

コンサートホールに行ってみると、おじいちゃんの年の人がたくさん会場の前で並んでいた。私たちもその人たちの後に並んだ。しばらくして前の人たちが何か話している声が聞こえてきた。

「来年は六十周年ですね。」「あれからもうみんなにたったのですか。」

それを耳にしたおじいちゃんは、ゆっくりとした口調で私に話しかけた。

「京都のオーケストラができるて来年は六十周年になるんだよ。おじいちゃんはこのオーケストラができるときの最初の第一回の定期演奏会に行つたんだよ。」

「え、六十年前に。その時はどんな様子だったの」と聞くと、おじいちゃんはなつかしさに話した。

「あれは確か六月だったかな。あの頃は、今のようにインターネットなどで簡単に音楽が聴けなかつたからね。テレビもまだまだぜいたくなものだつたね。それに、音楽も大事だけど、もっと大事なものがあるだつて、思つていた人もたくさんいた時代だったからね、戦争によつて壊れてしまつた道路や鉄道、工場や住宅をなおすのが先だつてね。」

「ふーん。その日はどんな様子だったの？」

「えうだね。たくさんの人が円山公園にある音楽堂に集まつたよ。何だか『我が町、京都のオーケストラだ』って、熱い思いが本当にすいかつたね」

「我が町、京都・・・」

ふと気がつくと、会場の入口に向かつて人が動き出していた。私たちもゆっくり会場に入つて、そして、チケットに書かれている決まりの席に座つた。

しばらくして演奏会が始まった。会場はお密ひんで満員だった。音楽の教科書でしか見たことのない楽器がたくさんあった。オーケストラの人たちはみんな一生懸命に演奏していた。ステージの後方には歌を歌う人たちもいた。

演奏はすごい迫力だった。楽器の音が耳からだけでなく、体に直接響いてきた。

すばらしい約2時間の演奏が終わった瞬間、一斉に大きな拍手が起こった。今までこんな大きな拍手を聞いたことがなかった。私たちの前に座っていた人は拍手をしながら何度も何度もハンカチで目あたりをぬぐっていた。ふと横に目を向けると、おじいちゃんもハンカチで目あたりを押さえていた。

会場の出口では、オーケストラの人たちが私たちを見送るために一列に並んでいた。おじいちゃんは、すっと背筋を伸ばして、オーケストラの人たちに向をかけた。

「すてきな演奏をありがとうございました、本当にありがとうございました」

そして私の頭をなでながら、

「この子たちのためにも、これからもがんばってください、よろしくお願ひします。」

オーケストラの人たちは、

「はい、ありがとうございます。がんばります。」といついつい答えた。

コンサートホールからの帰り道、私は演奏会の様子を思い出していた。そしてオーケストラの人たちのことをずっと想えていた。やねじ、

「我が町、京都のオーケストラ」

といい言葉聞こえてきた。

「我が町　京都か・・・」

わたしあおじいちゃんのいれしやの横顔を見上げながら、

「京都」をとても語りこぶ思えた。

5年	主題名	景観を守る	内容項目	D 自然愛護
	教材名	比えい山の眺め	出典	自作資料
	学習のねらい	もう一度比叡山を眺めたときのわたしの気持ちを考えることを通して、景観を大切に、守っていこうとする心情を育てる。		
	本時の評価	景観も自然環境の一つとしてとらえ、身近な景観を大切にし、これからも守っていこうとする思いをもっている。		
	授業に至るまでに	国語科や社会科等の環境に関する単元で学んだ学習をもとに、事前に新聞や雑誌、テレビなどからの情報収集を促し、自然や環境、景観の問題についての关心を高める。		
	学習活動（発問）	*留意点	評価の視点 (評価の方法)	
導入	1 すばらしい風景や景色の写真を見て感想を交流する。	*本時のめあてを板書する。 「景観」について考えよう。		
展開前段	2 教材「比えいの眺め」を読んで考える。 (1) 景観条例のため、自分の家を自由に直すことができないと聞いたとき、わたしはどんなことを思つただろう。 (2) おばあちゃんの「このすばらしい眺めをなくしてしまうのは簡単だから・・・」の言葉を聞いたとき、わたしはどんなことを考えただろう。 ★(3) 悠々とそびえる比叡山を、もう一度眺めたとき、わたしはどんなことを考えただろう。	*京都だけでなく全国各地にも景観条例があることを紹介する。 *景観条例に対する疑問や否定的な意見も取り上げる。 *おばあちゃんの言葉をフラッシュカードによって黒板に提示する。 *グループや全体での交流を意図的に行うことにより、中心発問の「どんなことを考えただろう」についての思考が深まるようとする。		
展開後段	3 自分たちの生活と重ねて、ねらいとする道徳的価値について考える。 (1)これまでの生活をふりかえって、すばらしい風景や景色を見たことはありますか。そのときどんな気持ちになりましたか。	*すばらしい風景を見たときに感じた「思い」に注目し、交流する。 *長期宿泊学習等の具体的な体験を通して考えられるようにする。	景観も自然環境の一つとしてとらえ、身近な景観を大切にし、これからも守っていこうとする思いをもつていい。 (道徳ワークシート)	
終末	4 今日の学習をふり返って、本時のめあてに対する自分の思いや考えを書きまとめる。	*「私たちの道徳」を参考しながら、自分の思いや考えを書きまとめられるようする。		
板書計画	<p style="text-align: center;">景観</p> <p>(3) 中心発問に対する児童の発言</p>  <p>(2) の発問に対する児童の発言</p> <p>(1) の発問に対する児童の発言</p> <p>自分の家なのに、自由にできない。</p> <p>比えい山の眺め</p> <p>道徳「景観」について</p>			
授業後	身近な自然環境や景観破壊の事例を詳しく調べ、さらにこの問題について自分の考えをまとめたり、自分たちにできることを話し合ったりして、実践する活動を考える。	「私たちの道徳」の活用 「行動の記録」との関わり	自然の偉大さを知って 生命尊重・自然愛護	

比叡山の眺め

秋の京都にはたゞやんの観光客がやつてゐる。バスも地下鉄も大きな荷物をもつた観光客でこつせん混んでゐる。最近は外国からの観光客を見かけない」とか呟くようになった。

ヒーリングで、私のおばあちゃんが、比叡山の眺めがここ高野川の近くに住んでゐる。おばあちゃんの家に遊びに来たのも、桜が満開だった春以来だ。おばあちゃんがなつたのに、おばあちゃんの家の近くではマンションの工事も始まつていた。

おばあちゃんは一人で暮りつてしまふ。去年おじこちゃんが亡くなつて、お母さんは一人で暮りすおばあちゃんが心配のようだ。夏あたりから、おばあちゃんと一緒に暮りつてしまふ。でも、おばあちゃんはがんとつて聞かない。

「一人暮りしが気楽でこそ」

前におばあちゃんはじつわたりして教えてくれた。

かばんを置いて、テーブルのあいだ座敷に行ひへと、おばあちゃんはお茶し和菓子を出してくれた。甘じ香りのする和菓子をせせらぎながら、「おばあちゃん、本当に一緒に暮りたいの。お母さんもじつかり引つ越しておひきよ」と聞こつみた。

おばあちゃんが「じつせむおじかね」ひ叩ひのド、「あつたの建て頃べし、壁根も壁も畳もこぼりこじらしたつてこじやなこ」とひ叩ひと、「れなはでもなこね」と笑つた。

「景観条例つていうのがあつて、このあたりは建物の軒ひや屋根の色、壁の色を自由につけさせられないんだよ。」

「えー、じつこと。この家はおばあちゃんの家だよね。自分の家なのに、自由にできないの。ねえ、じつこと。」

ヒーリング、おばあちゃんは私の耳を傾けながら、「少し散歩でも行ひつか」

と私を散歩に誘つ出した。川沿いの道はもみじでいっぱいだった。こづれひへと、近くの高野川にかかる橋の上まで来ひて、おばあちゃんは比叡山を眺めながら話し始めた。

「おばあちゃんは、じいかの景観の比叡山の眺めが大好きなの。この眺めはおばあちゃんのものでせなうし、誰のものでせなうかれど、みんなのものなのよ。ゆく、じいかの景観の比叡山の眺めが、高こマンションやビルで見えなくなつたひ、じいせいだ。」

確かに橋の上から比叡山の方をよく見ると、眺めを遮る高い建物がないことに気がつく。他の都市では当たり前のように見られる高層マンションも見当たらない。つなづく私に、おばあちゃんは私の手を取って語りかけた。

「このあたりじて眺めをなくしてしまったのは簡単だから……。」

ふと横を見ると、外国からの観光客らしい人が比叡山の方にカメラを向けていた。そして「あはりここ、あはりここ」と並んで日本語で何度も何度も言いつながらシャッターを切っていた。

「あなたの家に戻りつか」

「おばあちゃんが口を開くと、私は思わず

「もう少し」といって

と言つた。おばあちゃんは

「じゃあ、先に戻つておくな

と言つてゆきつゝ我が家の方へと歩いていった。

私の田線はおばあちゃんの後の姿から、比叡山の方に移りました。

私は、やつものおばあちゃんの顔を思い出していた。

そして、真っ青の空に悠々と伸びる比叡山をひとつじつと眺めた。

6年	主題名	自分を知る、自分を変える	内容項目	A 個性の伸長
	教材名	わたしの大文字駅伝	出典	京都市小学校道徳教育研究会 改
	学習のねらい	お母さんに「もも子、変わったね、よかったね」と言われたときのもも子さんの気づきを考えることを通して、自分の短所を知り、それらを改め、自分を変えようとする態度を養う。		
	本時の評価	自分の短所を知り、それらを改め、自分を変えようとしている。		
	授業に至るまでに	・短所も自分の個性の一つであると肯定的に捉えられるようにしておく。 ・できなかつたことができるようになる成功体験を積み上げておく。		
	学習活動(発問)	*留意点	評価の視点 (評価の方法)	
導入	1 自分の長所や短所について交流する。 ・自分にはいいところやなおしたいなと思うところがありますか。	*本時のめあてを板書する。 「自分を知る・変える」ことについて考えよう。		
展開前段	2 教材「わたしの大文字駅伝」を読んで話し合う。 (1) お母さんに「続けられそうにないなら、最初からやめておきなさい」と言われたとき、もも子さんはどんなことを思ったのだろう。 (2) 大文字駅伝の予選会が終わったときのもも子さんの気持ちを考えてみよう。 ☆(3) お母さんに「もも子、変わったね。よかったね。」と言われたとき、もも子さんはどんなことに気づいたのだろう。	*挿絵やキーワードを提示しながら、教材を読む。 *簡単に大文字駅伝の説明をしておく。 *児童の発言を受けて、その時のお母さんの思いにも迫る。 *お母さんの言葉ともも子のようすを板書する。 *個人で考える時間をしっかりと確保する。		
展開後段	3 これまでの生活を振り返り、ねらいとする道徳的価値について考える。 (1)これまでに、自分の短所に気づき、直そうとしたことはありますか。 その時、どんな気持ちでしたか。	*大文字駅伝の取組以外の経験を意図的に取り上げる。 *本時のめあてを意識しながら、授業を進める。		自分の短所を知り、それらを改め、自分を変えようとしている。(道徳シート)
終末	4 今日の学習をふり返って、本時のめあてに対する自分の思いや考えを書きまとめる。	*私たちの道徳を参照しながら、自分の思いや考えを書きまとめられるようにする。		
板書計画	<p>自分を知る、変える</p> <p>(3) 中心発問に対する児童の発言</p> <p>大きくなさい</p> <p>「もも子、変わったね。よかったね。」</p> <p>(2) の発問に対する児童の発言</p> <p>(1) の発問に対する児童の発言</p> <p>大文字駅伝の予選会が終わる</p> <p>「続けられそうにないなら、最初からやめておきなさい」</p>	<p>●自分が好きになれなかつた ○どうせ、わたしにはできない ○最後までやりきれない</p>	道徳「自分を知る、変える」ことについて考え方 わたしの大文字駅伝	
授業後	もう一度の自分自身を振り返り、これからも伸ばしていくきたい自分のよさや自分の改めたいところを考え、卒業までの生活に活かしていく。	「私たちの道徳」の活用 「行動の記録」との関わり	1—(6) 短所を改め、長所を伸ばして 自主・自律	

わたしの大文字駅伝

私は小さいときから、何をしても長続きしなかった。幼稚園の頃、新しいおもちゃを買つてしまつてすぐ飽きて、こいつかがうおもちゃがほしいなつていた。ブロックで遊んでも、パズルをしても、今まで一度も最後までやつあることができた。やる前から「ひいせい、私にはでもない」といつも途中であきらめついた。お母さんも「それが、やせじの短所やね。なおさらことね。」といつも言つてた。高学年になつても、私の「短所」はなかなかおらなかつた。そんな自分がこれまで好きになれなかつた。

私が五年生のとき、六年生は毎日、マラソンの練習をしていた。参加を希望した人だけが参加していたのだが、大文字駅伝の本選出場を田指して、暑い日も寒い日も練習を休まずにがんばつていた。秋の予選会が近づいてくると、何となく学校が盛り上がりつていた。しかし「私には大文字駅伝は関係ないや」とずっと思つていた。運動も得意ではないし、走るもの遅い。そして何より最後まで「続ける」ということができずにこれまで過ごしてあつた。

六年生になつてすぐ、マラソンの練習について説明会があつた。私は全く練習に参加する気はなかつたのだが、大の仲良しのあいのわさんが「もうひと歩もいっしょに参加しようよ」と誘つてくれたので、マラソンの練習に参加すれどになつた。

家に帰つて、マラソンの練習に参加するのをお母さんに聞ひ、お母さんは「やせじ、本当に続けられるの。途中でやめたら、みんなに迷惑をかけてしまつわよ。続けられそうにならない、最初からやめておきなさい」と言つた。私は考え込んでしまつた。夜になつても、マラソンのこと気がになつてしまつなかつた。(どうせ私はできないから) と聞こ聞かせながら(明日、先生に参加するのをやめますと言おひ)と心に決めたの日は眠つてついた。

翌日から早速マラソンの練習が始まつた。しかし私は先生に「やめます」と言ふなかつた。言ふタイミングを失つてしまつたのだ。準備体操の後、運動場を十周、自分のペースで走つた。初日はとても疲れた。次の日からもマラソンの練習は続いた。だんだん走る距離も長くなつて練習はしんどくなつてきた。あきらめてもしないやつだった。お母さんにはマラソンの練習をやめられないとも言えずいた。でもきっとお母さんは気づいていた。いつも私の体操服がきれいにたたまれていて、机の前に置かれていたから……。こつの間にか夏休みになつてついた。これまであまり参加しなかつた学校の水泳学習にも参加するよになつた。毎年、夏休みにおじいちゃんの家に遊びに行つてついたが、今年は練習を休むことがないよつて田代じかを変えた。気がついて練習が始まつてから一日も練習を休んでいなかつた。

学校の木々が赤く染まりはじめ、いよいよ大文字駅伝の予選会の日がやっときた。「じじめがんばってました」とこっちはみんなもつていた。私は予選会に出場するメンバーには選ばれなかつた。悔しい気持ちはあるたけれど、友だちの走りを一生懸命に応援した。声をからして応援した。遠くに応援に来ていたお母さんを見つめた。でも何か話す気にはなれなかつた。わたしたちの学校は途中までトップを争つてた。しかし結果は予選会四位だった。本選への出場は一位までなので、残念ながら本選への出場するとはできなかつた。

予選会が終わつたあとの帰り道、みんなの顔は少しうつむいていた。本選に出てはなかつた悔しさとせひ練習が終わつてしまつたのが混じつたような気持ちだつた。

「ただいま」

私の声は心なしか力がなかつたのだね。お母さんは私に声をかかれていたばかり「描しかつたね。でもみんながんばつてましたね」と囁つた。お母さんの顔は聞こえていたけれど、これまでの疲れがじつと出たのだね。私は部屋の真ん中でぐつたりとして座わつこんだ。

「ひー」

じため息をついたとき、お母さんは私の隣に近づいてきた。そして私の顔をじつと見ながら、にこりとして話しかけた。
「もうい、変わつたね。よかつたね。」

私は、今までの自分を思い出しながら、大きくうつなずいた。

6年	主題名	世界の国々とつながるために	内容項目	C 国際理解、国際親善
	教材名	「源氏物語」と出会ったときから ～日本文学者ドナルド キーン～	出 典	自作資料
	学習のねらい	ドナルドキーンさんが日本文化を世界に発信し続ける理由を考えることを通して、世界の国々の人々や文化について理解し、積極的につながっていこうとする態度を養う。		
	本時の評価	世界の国々の人々や文化について知り、自ら積極的につながっていこうとしている。		
	授業に至るまでに	<ul style="list-style-type: none"> 普段の生活において、新聞やテレビ、インターネット等のメディアを通して発信される世界の情報について知る機会をもつておく。 社会科の歴史学習で、第二次世界大戦および太平洋戦争中の世界や日本の様子を指導しておく。 		
	学習活動（発問）	*留意点		評価の視点 (評価の方法)
導入	1 興味・関心のある国について交流する。 (1) 行ってみたい国はありますか。	<ul style="list-style-type: none"> 本時のめあてを板書する。 「世界の国々とつながる」ことについて考えよう。 		
展開前段	2 教材『『源氏物語』に出会ったときから』を読んで話し合う。 (1) キーンさんの『『源氏物語』に心奪われた』とはどのような感じなのかな。 (2) 「日本の研究なんかやめろ」と言われたとき、キーンさんはどんなことを考えただろう。 ☆(3) なぜドナルドキーンさんは「日本文化」を世界に発信し続けるのだろう。	<ul style="list-style-type: none"> ドナルドキーンさんの写真やプロフィールを提示する。 『源氏物語』の基本的な知識を確認する。 本時のねらいである「世界の国々とつながる」を意識できるように、送り手（キーンさん）の思いだけでなく、受け手側の思いにもせまる。 		
展開後段	3 これまでの生活を振り返り、ねらいとする道徳的価値について考える。 (1) みなさんは、これまでに世界の国々とつながったことはありますか。 (2) これからみなさんはどのようにして世界の国々とつながっていけるかな	<ul style="list-style-type: none"> 何気ない「世界との出会い」が国際親善の第一歩であることに気づかせたい。 自分なりの世界の国々とのつながり方をこれまでの生活と重ねながら考えさせる。 		
終末	4 「私たちの道徳」の「世界の人々とつながって」を読んで、今日の学習を振り返る。	*「私たちの道徳」も参考にしながら、本時の授業のふりかえりを道徳シートに書き留める。		
板書計画	<p>The diagram illustrates the progression of the lesson. It starts with the first question (1) and moves through three stages of discussion (2), a final reflection (3), and concludes with the final reflection (4). Each stage is associated with specific outcomes or activities, such as writing on the board, discussing the author's feelings, and reflecting on the meeting with the world.</p>			
授業後	<ul style="list-style-type: none"> 社会科「日本とつながりの深い国々」の学習が「国際親善」につながることを確認しておく。 普段から新聞やテレビ、インターネット等によって世界の情報を知る機会をもつ。 		「私たちの道徳」の活用 「行動の記録」との関わり	4-(8) 世界の国々とつながって 公共心・公徳心 思いやり・協力

「源氏物語」と玉伝つたじきから ～日本文学者ドナルド・キーン～

みなさんは、ドナルド・キーンさんを知っていますか。一九二二年にアメリカで生まれ、今年九十三歳を迎えた日本文学者です。アメリカで生まれましたが、東日本大震災のあと、日本国籍を取得されたことでも有名です。日本の文学を、そして日本文化を広く世界の人々に紹介した功績は大ききものがあります。この功績に対して、平成二十年に文化勲章が授与されました。

そのドナルド・キーンさんと日本をして京都とのつながりをひもといふと一つの日本文学からはじめます。

それはキーンさんがアメリカ ハーバード大学に入学して2年目のことでした。ヨーロッパでは第二次世界大戦が勃発し、日本では日中戦争の真っ只中という時でした。ある日、キーンさんは本屋で一冊の本と運命的な出会いをします。その本とは皆さんもよく知っている「源氏物語」です。キーンさんは「源氏物語」に登場する人物の心の動き、日本の情景、そして美しい言葉に「心奪われた」と同時に返っています。

その後、キーンさんは「日本文學」だけでなく「日本人」や「日本文化」についての研究を深めていました。しかし、おもなげ、日本とアメリカはお互いに戦うことになりました。キーンさんもアメリカ兵として日本との戦争に参加することになりました。

戦争の結果は、みなさんご存じの通りです。日本はアメリカやイギリスなどの連合国に無条件降伏しました。日本は戦争に負けたのです。戦争中も日本兵との関わりのあったキーンさんは終戦後も日本の研究を続けました。しかし、ある時、他の研究者からいのよくな言葉を言われるのです。「日本の研究なんかやめる。日本は他の国のまねばかりしている、オーラジナリティのない国だ」

キーンさんは怒り心頭でした。同時に「もっと日本の研究を深めていただきたい」という気持ちも強くなりました。

しづかにして、キーンさんと日本をして京都とのつながりがさらに深まっています。昭和二十八年、キーンさんは京都大学に留学することになったのです。

京都大学留学時代、次のようなエピソードがありました。当時の京都はまだ戦争の傷跡が残っていましたが、大きな空襲をうけていたため、古き良き日本が残っていました。ある晩の月と、キーンさんはあまりの月の美しさに、「こんな月の光に照らされた竜安寺の石庭はとても美しかった。ぜひ見てみたいものだ」と思い、すぐさま竜安寺へ向きました。

キーンさんは月光に照らされる石庭の美しさに身動きがとれませんでした。小一時間ほどぼんやりと石庭を眺めていると、ふとかたわらい、いつ間にか一杯のお茶が置かれていました。

「（）なんおもてなしができるのは日本人だけだ」

キーンさんはそのさりげないおもてなしに感激したのでした。

また、こんなこともありました。

京都に来て間もない頃、桜を眺める会食がありました。参加した人たちは、桜を眺めながら楽しそうに食事をしたり語り合ったりしていました。

キーンさんにとつてそれは不思議な光景でした。

「なぜ、桜を眺めるのが楽しいのだ？」

キーンさんは思わず、近くの女性に言いました。

「日本人はなぜ、そんなに桜が好きなのですか。桜は確かに美しいです。しかしすぐに散ってしまいます。花びらのやうじが大変ではありますか？」

その女性は言いました。

「それはがないところに心がひかれるのです」

キーンさんはその言葉から、自然の様々なことにも深く感じ、意味を見い出す日本文化の美しさを心から感じたのです。

京都大学への留学を終え、アメリカの大学に戻ったキーンさんは、大学で日本語や日本文学を教えながら、川端康成をはじめとする日本を代表する作家たちと交流を深めていきました。さらに研究を進め、「日本文学選集」を発行しました。その本は現在でも日本文学の入門書として世界各国で読まれています。昭和六十一年には、コロンビア大学内に「ドナルド・キーン日本文化センター」を設立、外国から日本文化を発信することを積極的に進めていました。キーンさんの日本に関する著作は、英語・日本語を問わず、五十以上にもなり、世界の人々が日本文化を知る上で大きな役割を果たしています。平成二十六年には（）京都の名誉観光大使にも就任しました。

「源氏物語」と出会ったあのとおりから、キーンさんは「日本文化」を世界に発信し続けています。